

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00944

研究課題名(和文) 公家と武家の文芸活動から見る戦国時代史の研究

研究課題名(英文) A study of the Sengoku period (period of the warring states) focusing on the literary culture developed by court nobles and samurai families

研究代表者

尾下 成敏(Oshita, Shigetoshi)

京都橘大学・文学部・教授

研究者番号：70378496

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、おもに16世紀を対象に、今川氏を始めとする東海地方(駿河・遠江・三河・尾張・北伊勢)の武家の文芸活動や、京都における鞠会(蹴鞠の会)の展開過程を追究したものである。本研究では、戦国時代の東海地方の政治過程に関する近年の研究や、国文学の研究成果を踏まえて、1)今川文芸(和歌・連歌)の展開過程を動態的な形で描き直し、2)今川文芸と北伊勢・尾張・三河の武家文芸との関わりを明らかにした。また、3)16世紀京都の鞠会の事例に関する一覧表を作成し、4)これまで不明確であった京都の鞠会の展開過程を、蹴鞠を介した公家と武家の交流という視点から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、戦国時代の地方文化の代表格とされる今川文芸を検討し、(1)今川氏の内では、文事に心を懸けるという動向と、文事を抑えて武事を優先する動向があり、今川義元の時代には、この2つのせめぎ合いが見られることを明らかにした。また(2)16世紀京都の鞠会の事例を一覧化し、同地における鞠会の展開過程を明らかにした。戦国時代の政治状況からすれば、(1)の指摘は今川氏にのみ当てはまるものではなく、他の戦国時代の地域権力においても広く見られる可能性が高いと考えられる。また(2)の成果は、京都に限定されるとは言え、室町・戦国時代の蹴鞠史の展開をとらえるための土台が出来たことを意味する。

研究成果の概要(英文)：This study, which mainly covers the 16th century, aims at clarifying firstly how the literary culture of samurai families, such as Imagawa, developed in the Tokai region, and secondly how Kemari meets in Kyoto spread.

To achieve these goals, we take the following steps on the basis of prior studies of the political process in the Tokai region during the Sengoku period as well as of recent research in the field of Japanese literature. First, we offer a dynamic view of the literary activity such as waka and renga poetry in the Imagawa family. Second, we reveal the relation between the Imagawas' literary activity and that of samurai families in Northern Ise, Owari, and Mikawa. Third, we show the list of the Kemari meets held in Kyoto in the 16th century. And finally, we investigate how Kemari meets spread in Kyoto, which is unclear so far, focusing on the communication between court nobles and samurai families through Kemari.

研究分野：日本史

キーワード：戦国時代 文化史 和歌 蹴鞠 連歌

1. 研究開始当初の背景

戦国織豊期の文芸のうち、公家がおもな担い手となる和歌・蹴鞠や、公家・武士の間で流行した連歌に関する研究を見ると、国文学の研究者による研究成果が多く、歴史研究者による研究成果が極めて少ないことに気づく。その要因としては、武士と庶民の動向が当該期における政治・社会状況の変化を規定した、という歴史観(歴史研究者の大多数は、こうした見方に立つと思われる)の存在が挙げられよう。このような見方は、文化史の研究において、武士や庶民が主要な担い手となる文化(茶湯・能楽・風流踊など)を検討の俎上に乗せる一方で、公家が主たる担い手となる文化の本格的な検討をためらわせたのではないか。しかし、和歌が近世的教養文化の中心に位置していた点や、織豊期もしくは江戸時代初期に蹴鞠や連歌が武士や公家の間で重んじられた芸能であったことを踏まえるなら、江戸時代の前段階、とくに戦国織豊期における和歌史・蹴鞠史・連歌史の展開を明らかにしておく必要がある。

和歌・連歌・蹴鞠に関する先行研究の問題点を挙げると、(1)国文学の和歌・連歌に関する研究は数多の事例を収集し、和歌史・連歌史の大きな流れを提示したものであるが、歴史研究者の目から見て、それらは動態的な分析が弱く、戦国織豊期研究への活用が実は容易ではない。(2)16世紀における蹴鞠史については、基礎的な事実の集成が進んでいないという点がある。以上から、和歌史・連歌史に関する動態的な分析を推し進め、蹴鞠史に関する基礎的な事実を集成することで、戦国織豊期の文化史を描くための土台を強固にする必要がある、と研究代表者(尾下)は考えた。

2. 研究の目的

本研究では、戦国織豊期を「戦国時代」と呼び、当該期の大半を占める16世紀を対象に、東海地域に形成された今川分国の文芸史に関する考察を行うこと、鞠会(蹴鞠の会)の事例一覧表を作成し公開すること、京都の蹴鞠界における飛鳥井家の位置を明らかにすることを目的に据えた。

今川分国を検討の対象に据えたのは、戦国時代の地方文化のなかで、今川文化が中国地方の大内文化や北陸地方の朝倉文化とならぶ、戦国三大文化の一つとされてきたことが理由である。

鞠会の事例一覧表の作成を行うのは、戦国時代の蹴鞠史の展開を明らかにするための基礎資料が無かったためである。また京都の蹴鞠界における飛鳥井家の位置を明らかにしようとしたのは、同家が中世・近世の蹴鞠界を主導した存在と見られているにも関わらず、京都の蹴鞠界における飛鳥井家の位置が明確ではなかったことによる。

本研究では、以上のように研究の対象を絞った上で、地方文芸史を検討する際の新たな視角の提出や、蹴鞠史研究を行うための土台の構築を目指した。

なお、当初は、16世紀の飛鳥井家の在国(地方滞在)に関する考察を行う予定であった。しかし、2020年の新型コロナウイルスの感染拡大により、史料の閲覧・調査が極めて難しくなったため、研究計画を変更し、上記の課題に取り組むことにした。

3. 研究の方法

上記～の課題に取り組む際は、以下のような方法で進めた。

まず上記については、先行研究を精査し、また歌集や紀行文、静岡・愛知両県内の自治体史などから分析のための史料を収集して、分析を進めた。上記については、16世紀の古記録などから鞠会史料を収集する作業を行った。また上記の課題に取り組むに当たっては、上記の研究成果(後述)をもとに、飛鳥井家の動向に関わる史料を読み直す作業を行った。

なお、上記およびの課題に取り組むに当たっては、国立公文書館、東京大学史料編纂所、宮内庁書陵部、京都大学大学院文学研究科日本史古文書室などの史料所蔵機関を訪問し、活字化されていない古記録の閲覧・調査や、写真撮影などを行った。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下の通りである。

(1)戦国時代の今川分国、なかでも駿河・遠江を対象とした研究では、武事(おもに軍事行動)をはじめとする東海地方の政治過程との関連から、歌壇・連歌壇の展開を動態的に跡付け、例えばつぎのような点を明らかにした。(ア)16世紀半ばの当主今川義元の時代には、和歌・連歌のような文事に心を懸ける動きと、文事を抑えて武事を優先する動きがせめぎ合っていた。(イ)義元の後継者今川氏真是文事に心を懸けようとする志向を持ちながらも、それが叶わないまま、今川分国の崩壊という事態を迎えた。

(2) 東海地方へ下向した連歌師(宗長・宗牧)の動向から、今川文芸と北伊勢・尾張・三河の武家文芸との関わりを検討し、今川氏の重要な文芸指導者・文化伝達者であった宗長の活動が、北伊勢・尾張・三河の武家連歌壇の展開に寄与するものであったことを明らかにした。

なお、(1) と(2) は、上記 の課題の成果である。

(3) 鞠会の事例一覧表の作成では、16世紀の京都で行われた鞠会を対象とし、840件余りの事例を紹介した、『京都橘大学史料研究報告集第9集 16世紀京鞠会の基礎的研究』(以下【京鞠会】)を刊行した。これは上記 の課題の成果である。

(4) 上記の事例一覧表をもとに、16世紀京都の蹴鞠史の展開過程に関する論考を執筆し、【京鞠会】に掲載した。この論考では、鞠会に出場した鞠足(プレイヤー)の動向から、(ウ)武家とくに有力大名細川氏の一門や被官、足利将軍に仕える奉公衆らが16世紀京都の鞠会を支えた点や、(エ)鞠道家飛鳥井家のなかでも飛鳥井雅親の系統の人々が、16世紀京都の蹴鞠界において指導的な立場にあった点などを明らかにした。

(5) 戦国時代の飛鳥井家の鞠会のなかでも、従来から注目されてきた破子鞠の会について検討を行った。そして、この会に鞠足として参加した武家や、会の遂行に関与した武家の動向から、豊臣政権期の破子鞠の会が、戦国・織田政権期の破子鞠の会とは性格が異なる会であることを明らかにした。

なお、(4) と(5) は、上記 の課題の成果である。

付言すると、上記の研究成果のうち、(1) のもととなる成果については、中世史研究会(愛知県名古屋市)の例会で研究報告を行った。(3) と(5) については、藝能史研究会オンライン大会の一般報告において研究報告を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 尾下成敏	4. 巻 28
2. 論文標題 西洞院時子の禁裏出仕 豊臣政権期のある女官とその父の動向	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 女性歴史文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 65 - 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 尾下成敏	4. 巻 6
2. 論文標題 戦国期東海地方の文芸と武家領主 北伊勢・尾張・三河の事例を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究論集 歴史と文化	6. 最初と最後の頁 51 - 70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾下成敏	4. 巻 44
2. 論文標題 戦国期今川氏と和歌・連歌	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報中世史研究	6. 最初と最後の頁 115 - 147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾下成敏	4. 巻 234
2. 論文標題 戦国織豊期飛鳥井家の破子鞠の会について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 藝能史研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 尾下成敏
2. 発表標題 戦国期今川文化の再検討
3. 学会等名 中世史研究会（愛知県名古屋市）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 尾下成敏
2. 発表標題 十六世紀、京鞠会の展開過程
3. 学会等名 藝能史研究会オンライン大会・一般報告
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 尾下成敏	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都橘大学文学部歴史学科	5. 総ページ数 124
3. 書名 京都橘大学史料研究報告集第9集 16世紀京鞠会の基礎的研究	

1. 著者名 馬部隆弘、谷徹也、尾下成敏	4. 発行年 2021年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 292
3. 書名 京都の中世史第6巻 戦国乱世の都	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------